

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：14301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H06880

研究課題名(和文) relatedness概念に依拠した北インド・チベット系社会の親族に関する人類学

研究課題名(英文) Anthropological Study on Kinship in Tibetan Society in North India

研究代表者

中屋敷 千尋 (NAKAYASHIKI, Chihiro)

京都大学・人文科学研究所・研究員

研究者番号：00784498

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、これまで重要性が指摘されつつも内実を解明されてこなかった、チベット系社会における親族ニリンの内実と構築過程を明らかにすることで、チベット系社会の親族研究に、系譜だけではなく、日々の関わりから築かれる柔軟な親族の領域を切り開くとともに、人類学の親族研究に対し、親族と非親族の区別の曖昧さを指摘し、さらにサブスタンスの交換に還元されない親族の側面を提示した。研究成果は、論文の刊行と学会発表、国際カンファレンスにて発表した。

研究成果の概要(英文)：This study clarified how a kind of kinship named “nirin” is created in the daily lives of people in the Spiti Valley, and how they are/become related to each other as nirin. Through this examination, this study made clear that kinship such as nirin has an important role in Spiti although it has not been paid academic attention for a long time. The distinction between kinship and non-kinship, as it has been supposed in previous kinship studies of Tibetan people, should be recognized not as inherently given but as appearing depending on situations and relations.

It is necessary to focus on this kind of flexible kinship in Tibetan studies. This study also reconsiders substance theory in anthropological studies on kinship. While these studies focus on transactions between people, this study pointed out that people’s behavior cannot be reduced to transactions of substances. These research results were presented in the internal and the international conferences and the journal article.

研究分野：文化人類学

キーワード：親族 関わり合い サブスタンス 共住 相互行為

1. 研究開始当初の背景

(1) チベット系社会における親族研究では、父系出自集団と世帯に注目が集まり、これらに還元されない日々の関わりを通して築かれる親族範疇については、その重要性が指摘されつつも、内実は解明されてこなかった。

スピティ渓谷の親族を調査した棚瀬(2008『インドヒマラヤのチベット系諸社会における婚姻と家運営』博士論文, 京都大学)はインドの法的、政治的、社会的変化が、スピティの世帯運営と婚姻戦略、「家」のあり方、父系出自の観念にいかにか重層的に影響するかを分析するが、出自以外の日常生活を支える親族範疇には触れていない。ネパールのチベット系民族を調査したアジズ(Aziz, B. N. 1978, *Tibetan Frontier Families: Reflection of Three Generations from Dingri*, Vikas)が世帯よりも広い親族範疇としてキンドレッドの存在を指摘するが、その内容にはほとんど触れていない。

(2) 他方、人類学の親族研究に目を転ずると、長らく出自集団やキンドレッドの定義や範疇を分析する分類学的な研究がなされてきた(フォーテス、メイヤー, 1981, 「単系出自集団の構造」『家族と親族』大塚和夫訳, pp.63-100, 未来社)。また、親族の戦術的側面を分析する研究もなされてきた(Bloch, Maurice, 1971, *The Moral and Tactical Meaning of Kinship Terms*, *Man* (N. S.) 6(1): 79-87)。

しかし上記の研究に共通する問題として、「血縁関係」と「姻戚関係」を重視するあまり、生物学的、法的言説の優位性を暗黙の前提としている点があげられる。申請者が対象とする他人を含む親族関係ニリンのみならず、近年増加する移民や生殖医療の進展とそれに伴う法の整備の家族や親族のあり方への影響を理解するためにも、人類学における親族概念は大きな変革が求められている。この点に関しては、Janet Carstenの「関わり合い(relatedness)」の概念が有効だと考えられるため、この知見を活用し新たな親族関係のあり方について検討する必要がある(Carsten, Janet, 2004, *After Kinship*, Cambridge University Press.; Carsten, Janet, ed. 2000, *Cultures of Relatedness: New Approaches to the Study of Kinship*, Cambridge University Press)。

2. 研究の目的

本研究は、従来のチベット系社会における親族研究で扱われてきた父系出自集団などの単なる系譜関係とは異なり、日常生活を営むなかで築かれる互助的な親族ニリンがどのような関係かを解明することを目指した。

具体的には、北インド・チベット系社会を

対象にして、親族関係ニリンが、①日々の生活のなかでどのように構築され、②その様々な場面においていかに立ち現れるのか、③比較的新しく導入された選挙制度の影響を受けどのように意味づけられ、解釈されるのか、そして④非親族(他人)がどのように親族に組み込まれるのか、を解明することを目的とした。

なお、本研究の意義と特色は、以下のとおりである。第一に、従来のチベット系社会における親族研究では扱われてこなかった、日常生活を支える互助的な親族ニリンの内実を解明することを通して、従来指摘されてこなかった系譜に還元されない日々の関係性を基礎とした親族のあり方についての研究領域をチベット系社会の親族研究のなかに切り開く点にある。

第二に、本研究は、最近の親族研究が対象としている生殖医療や移民といった新たな対象ではなく、あくまでインドの農村地域を対象にいかにか他人が親族関係に含まれるのかを明らかにする点に特色がある。

第三に、近年出現してきた新たな対象ではなく、インドの山岳民族を対象に親族関係の概念を捉え直すことで、従来研究されつくされてきたようにみえる農村社会の親族についても、再度親族のあり方を見直す必要があることを、説得性をもって提起できる点に独創性がある。

3. 研究の方法

(1) 第一に、文献研究である。チベット系社会の研究と人類学における親族研究の流れを確認した上で、特に2000年以降親族概念の変革を試みているJanet Carstenをはじめとした親族研究の文献資料を収集し、精査した。この作業を通じて、人類学における新たな親族研究の全体像と傾向を明らかにするとともに、その可能性と問題点を整理した。

(2) 第二に、フィールド調査である。インドのチベット系社会において、短期間の参与観察とインタビュー調査を実施した。具体的には、親族ニリンをめぐる人びとの実践について、目的にあげた4つの項目に沿ってデータ収集を実施した。

研究方法については、インタビュー形式の調査では現地の人びとから血縁や姻戚関係の重要性についての言説ばかりが集まる可能性が考えられる。これには親族は助け合うべきとする社会規範や生物学的、法的言説の影響力が関係していると考えられる。そのため、基本的には参与観察を通して、対象の人々の実践を観察し、必要に応じてインタビューを行った。それと同時に人々の言説のあいだの齟齬や、言説と実践のあいだの相違についても把握した。

4. 研究成果

(1) ニリンが、婚姻を規定する父系出自集団や、生計と居住の共有を要件とする世帯とは異なり、日常を支えてきた親族範疇であることを明らかにし、併せて、それが重視されるようになった歴史的背景を明らかにした。

ニリンは、母系も含むため、キンドレッドとみなされうるが、それが個人的な親密さによって規定され、時に他人をもその範疇に含める点に大きな特徴がある。そのため、個人によってニリンの範囲は異なる。ニリンの関係は、物や労働力の交換、家の訪問、共食などを通じて構築され、日常生活を送るための重要な基礎となっていることを解明した。さらに、ニリンの関係は、単なる相互扶助関係だけでなく、情動をも含むような関わりであることを、死者儀礼をはじめとした具体的な事例から明らかにした。

この点は、従来の親族研究の道義と戦術の視点では理解できず、日々のサブスタンスの交換と共住を通じて親族が築かれる *relatedness* の視点から理解可能であることを解明した。

(2) また、ニリンは、儀礼や農作業などの異なる文脈では、その出現の仕方が異なることがわかった。

儀礼では、普段関わりのないような、ニリンとは呼ばれないような人びとがニリンとして言及されるようになり、儀礼に参加して顔を見せ、金銭や物資を贈与すべき存在として立ち現れる。これには、今まで連綿とつづけられてきた儀礼における贈与交換関係が関連しているほか、過去の親密な関わりが、関係が希薄になって以降も、儀礼の文脈で想起され義務または道義を喚起させるのだと考えられる。

その他、死者儀礼では、ニリンや隣人が、取り乱す遺族をなだめ、ともに寄り添い、支えていた。こうした人びとのあいだのつながりは、情動だけでなく厄災をも共有しうるつながりであった。このつながりは常に安定したものではなく、場合によっては何らかの出来事を契機として不安定化し、日々の生活における関わりが変化しうることも示した。

農作業においては、ニリンと呼ばれる人びとの中でも、同等の農地を有し、返礼が容易に可能である人に限って手伝いあう関係が築かれていた。それには、収穫量が少なく、収穫物による返礼が困難であることが要因だと考えられる。

他方、農地では、周りに他の人がおらず女性のみ空間であることから、普段なされないようなしぐさ、表情や声色での会話が可能となる。これを通して親密な関係が築かれていた。この関係は場合によっては義務関係にもなりうる。しかし、収穫量に影響する農業用水をめぐる神経をとがらせており、しばしば相手を非難し、水量調節を行うなど緊

張関係にあることを明らかにした。

(3) ニリンと非親族との関係の中でも、階層間関係については、階層間でニリンの捉え方に大きな違いは認められなかった。ただし、領主層と下層の人びとは、その人口の小ささから、中間層と比べると、スピティ内のニリンの数が少なく、ラダックやマナリといった他地域との関わりへと広がる傾向があることがわかった。

また、スピティでは、社会階層（領主層、中間層、下層）が内婚クラスを形成することから、階層間でニリン関係が築かれる事例は確認できなかった。

その他、階層間関係について、下層の人びとは、留保制度などにより政治的発言力が向上する反面、儀礼の宴会等において中間層から下層の人への差別発言や暴力行為が顕著になってきており、政治的地位の揺らぎへの反動ともとれるような現象が生じていることが明らかとなった。

他方、非親族の中でも、隣人と友人に目を向けると、ニリンよりも隣人のほうが日常的に関わり、細やかな相互扶助関係を築いていることを示した。相互扶助だけでなく暇な時間をともに過ごすなど、頻繁に関わっている。その過程で、隣人同士や居候は、どこで何をしているのかを把握しようとし、できるだけ時間を過ごそうとするといった、互いを気にかけて合うような現象が生じている。そこから義務関係が生まれることもある。

このほか、儀礼などの行事においても隣人は重要な位置づけにある。ときにはニリンの関係を越えるような対応をとることや、家族やニリンとして言及されみなされることもある。しかし、訪問される頻度や返礼の有無といった些細なことを契機として予期せぬ結果やジレンマが生じ、関係が不安定化することもあるなど、隣人関係は両義的であることを解明した。

以上からは、これまで親族研究で前提とされてきた親族と非親族との間の区別は明確ではなく、親族はその都度、文脈や関係に応じて暫定的に決められるようなものであることが明らかとなった。

(4) 上述したように、ニリンは柔軟な関係であるが、選挙を契機として固定化され利用され、政治的利益のために団体化したニリンが存在する。

基本的に、ニリンは個人個人の認識の範囲であるため、一般的に名称は存在しない。その中で、唯一名称を有し、インド人民党を支持する、男性率いる集団化したニリンが存在する。つまり、男性を中心とした団体化とその政治利用という現実がある。政治的な利権争いが活発になれば、関係の固定化と政治利用の動きはますます強まる可能性が考えられる。

ここには、父系出自集団とは異なる形で、男性を中心とした関係の固定化の兆候が伺え、今後、特にこの点についてスピティ社会を注視していく必要があることを明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①中屋敷 千尋、隣人関係における親密さと不安定さ——インド・スピティ渓谷におけるチベット系民族の事例から、コンタクト・ゾーン = Contact Zone、査読有、009 巻、2017 年 12 月、2—33 頁
https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/228314/1/ctz_9_2.pdf

[論文] (計1件)

①中屋敷 千尋、つながりの文化人類学——インド・チベット系社会における親族と非親族をめぐって、京都大学大学院人間・環境学研究科提出 (博士論文)、査読有、2017 年 9 月、207 頁

[学会発表] (計2件)

①Nakayashiki Chihiro, 'Tibetan Kinship and Acts of Sharing in North India', Examining the 'New' in Kinship and Family in South Asia, Department of Liberal Arts, Indian Institute of Technology-Hyderabad in association with Centre for Innovation in Public Systems (CIPS), 査読有, India, 1 February 2018

②中屋敷 千尋、「関わり合いが作り出す親族——ヒマラヤ地域・チベット系民族の事例から」、第3回ネパール・ヒマラヤ研究会「ヒマラヤ地域研究の最前線」、ネパール・ヒマラヤ研究会・南アジア・インド洋世界研究会 (共催)、査読無、京都、2018 年 1 月 20 日

[図書] (計0件)

なし

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中屋敷 千尋 (NAKAYASHIKI, Chihiro)

京都大学人文科学研究所・研究員

研究者番号: 00784498

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし